

薬師寺十字廊の調査（平城第 519 次調査）記者発表資料

2014 年 2 月 13 日（木）

法相宗大本山薬師寺

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所

※現地説明会は、2014 年 2 月 15 日（土）13：30 よりおこないます（小雨決行）。なお、調査地は薬師寺境内のため、拝観料（大人 500 円、中高生 400 円、小学生 200 円）が別途必要です。

調査の概要

今回の、薬師寺十字廊の発掘調査は、薬師寺境内保存整備計画に基づくものです。調査の結果、十字廊の建物および基壇の規模がほぼ確定し、基壇築成の工程や基壇外装の様相、造営や廃絶に関する年代の手がかりなど、多くの知見を得ることができました。また、十字廊の東側にある東小子房などの建物や、十字廊の北側に位置する施設に関わる遺構も確認できました。

1. 調査経緯

今回の調査は、法相宗大本山薬師寺がすすめている薬師寺境内保存整備計画に基づいた整備事業にともなうものです。調査地は、大講堂の北側、興楽門の南側に位置します。当研究所が昨年調査した食堂は、今回の調査区の南に隣接しています。十字廊の西半分は、当研究所が 1978 年に発掘調査をおこなっています。今回は、十字廊の正確な位置や規模を明らかにするために中央部以東を主たる発掘調査対象とし、また十字廊と僧房の一部である東小子房の関係をあわせて明らかにするため、東西約 39m、南北約 21m の調査区を設定しました。さらに、十字廊の北端を明らかにするために、南北 17m、東西 3 m の細長い調査区を北側に設定しました。調査面積は合計約 872 m²で、そのうち新規発掘部分は約 768 m²です。調査は 2013 年 9 月 17 日に開始し、現在も継続中です。

2. 薬師寺および薬師寺十字廊の歴史

薬師寺 薬師寺は天武天皇 9 年（680）に天皇が皇后（のちの持統天皇）の病氣平癒を祈願して発願した寺院です。これが藤原京の薬師寺で、現在は本薬師寺と呼ばれ、橿原市城殿町に東西両塔および金堂の土壇を残しています。その後、和銅 3 年（710）の平城遷都にともなって薬師寺も平城京右京六条二坊に寺地を移しました。

平城京の薬師寺造営に関しては、長和 4 年（1015）に書かれた『薬師寺縁起』に、養老 2 年（718）に伽藍を移すとの記載があります。発掘調査により東僧房北方の井戸から霊亀 2 年（716）の年紀のある木簡が本薬師寺式の瓦や奈良時代初頭の土器などとともに出土していることから、薬師寺の造営は霊亀 2 年には開始さ

れていたと考えられます。堂塔の建立に関しては、東塔の記録があり、天平 2 年（730）に建立されたことが『七大寺年表』（平安後期）や『扶桑略記』（平安末期）などにみえます。

十字廊 十字廊は、国内はもとより海外でも同じ名称の施設は見当たらず、『薬師寺縁起』によれば食殿とも呼ばれていました。その機能はあきらかではありませんが、食殿という別称からうかがえるように、廊としての機能だけでなく、食堂に付帯する機能をもっていた可能性もあります。基壇の西北部に埋まっていた井戸が廃絶した年代から、おそくとも奈良時代後半には建てられたと考えられます。

『薬師寺縁起』によれば、十字廊の規模は、東西 14 丈 1 尺、南北 5 丈 6 尺、柱高 9 尺 2 寸とされています。

他の建物がその規模を「長 14 尺、広 5 丈 4 尺 5 寸（金堂の事例）」のように長・広で表現するのに対し十字廊は東西・南北の大きさで表現することから、その名の通り十字形の平面形状をした建物だったようです。

十字廊は、天禄 4 年（973）にこの付近から出火した火災により焼失しました（『薬師寺縁起』、『扶桑略記』）。この火災は、薬師寺創建以来初めてとなる大規模な災害で、金堂と東西両塔以外の主要な伽藍のほとんどが焼失してしまいました。

その後、十字廊は寛弘 2 年（1005）に再建されたと記録されていますが、それ以後は十字廊に関する文献史料はみあらず、いつまで存続したかは不明です。延宝 2～4 年（1674～1676）の作とされる『伽藍寺中 并阿弥陀山之図』や元禄 2 年（1689）の伽藍絵図など、江戸時代の絵図には十字廊が描かれていないので、遅くともこの頃までには廃絶していたことは確実です。

3. 過去の発掘調査

薬師寺十字廊は、当研究所が、1978 年に西半分の発掘調査をしています。この調査で、十字廊が食堂の背後に存在することがあきらかとなりました。この調査では、十字形の平面のうち東西に長い東西廊西半の桁行 4 間、梁行 1 間分の礎石据付痕跡と、南北に長い南北廊の西側柱 1 間分の礎石据付痕跡を検出しました。さらに、基壇外装が、凝灰岩の羽目石を直接立て並べる形式であったことも明らかになりました。また、建立時期については、十字廊の基壇西北部で見つかった基壇に先行する井戸の廃絶年代が奈良時代中頃と考えられるため、十字廊の基壇は奈良時代後半頃に築成されたと考えられました。

これらの発掘調査成果と『薬師寺縁起』に書かれた情報をもとに、十字廊の全体像は、桁行 11 間・梁行 1 間の東西棟（東西廊）の中央から、前面（南側）に 3 間、背後（北側）に 1 間の張り出し（南北廊）のある十字形平面の建物であり、食堂と東西長がほぼ等しく、両端の柱筋をそろえて並び立っていたと想定されました。

薬師寺では大房・付属屋・小子房からなる僧房が東西に配置されています。東小子房は、東僧房の大房の背後に立つ建物です。東小子房はこれまで発掘調査が及んでいませんでしたが、東僧房の大房が西僧房の大房と同規模・同形式であるため、東小子房もまた西小子房と同規模・同形式と考えられていました。

また、今回の調査区の南に隣接する食堂は、当研究所が昨年実施した発掘調査の結果、桁行 11 間・梁行 4 間の礎石建物であり、その基壇規模が東西 47.1m（157 尺）、南北 21.6m（72 尺）であることが明らかになっています。

4. 主な調査成果

今回の調査では、十字廊や東小子房に関わる遺構のほか、十字廊と同時期に存在したと考えられる周辺の施設群に加え、十字廊廃絶後の遺構も検出しました。

A. 十字廊に関連する遺構

基壇 遺構の残りの良いところでは、現地表面下約30cmで検出しました。基壇は、特に調査区の東半分で近代以降の耕作や用水路などの設置により大きく削平されています。基壇は最も残りの良い箇所でも残存している高さが10cm未満です。基壇の造成には砂を多く含む土と粘土質の土をかわるがわる積み上げて突き固める版築はんちくの工法が用いられました。基壇の規模は、東西廊では基壇外装が残っているため東西・南北ともに明らかで、それぞれ44.4m（148尺）・8.1m（27尺）です。南北廊では基壇の幅は東西が8.1m（27尺）、南北は後世の削平のため明確ではありませんが、基壇の残存部分から推定すると21m前後となり、70尺に換算できます。東西廊の基壇の南端は、近世の水道管を埋設するための溝により破壊されています。

基壇外装とその周辺 基壇の縁辺部では、羽目石を用いた基壇外装と、それに伴う雨落溝あまおろみぞを検出しました。雨落溝は屋根から落ちる雨水を流すための溝です。通常、壇正積だんじょうづみ基壇は下から地覆石じふく・羽目石かづら・葛石かづらからなりますが、ここでは地覆石を用いずに羽目石を直接地面に立てる形式です。薬師寺では回廊にもこの工法が用いられています。雨落溝は南北廊の東西面では20～40cm大の川原石を敷いて作られていましたが、北面では素掘りの溝として検出されました。雨落溝の幅は、東西廊より南側で約60～70cm、北側で約40～50cmです。東西廊南面には木の板をあてて杭で固定した溝が検出されましたが、これは後世に改修したもののようです。羽目石には二上山にじょうざん山麓や春日山の地獄谷で産出する凝灰岩が用いられており、各所に残存していました。羽目石の長さは20～60cm、幅は18～20cmです。

礎石の据付痕跡 礎石は調査区内には残っていませんでしたが、礎石を据え付けた痕跡である壺地業つぼぢぎょうを確認しました。壺地業とは、礎石を据える部分をあらかじめ掘り込んで突き固める工法のことです。1辺1.1～1.5mの隅丸方形の掘方で、砂質土や粘質土、瓦を多く含む土などを層状に積む版築をおこなっています。基壇土の積み上げとの関連については、基壇をある程度積み上げた段階で壺地業が行われたものと考えられますが、壺地業を基壇版築の層が覆う場合も確認しています。また、場所によっては基壇底面よりも壺地業をより深く掘りこんでいます。出土遺物には奈良時代の瓦がありますが、平安時代以降のものは見られません。

十字廊の規模 今回発見した礎石据付痕跡は、十字廊の東西廊桁行7間分、南北廊桁行4間分です。南北廊の桁行については、後世の遺構による破壊のため、基壇北端の付近では壺地業が検出されませんでした。基壇規模から考えるとさらに1間北にのびる可能性があります。これに過去の調査成果と合わせて、十字廊は、東西廊が桁行11間・梁行1間、南北廊が桁行4間ないし5間・梁行1間、東西141尺、南北49尺以上と推定されます。柱間寸法は、壺地業の範囲からの推測になるため大まかな値しか分かりませんが、東西廊桁行が中央間約5.1m（17尺）、その外側2間が約3.9m（13尺）、両脇3間が約3.6m（12尺）、梁行が約5.1m（17尺）と想定できます。桁行は南北廊は中央より南側の2間は約3m（10尺）、東西廊と重なる部分の1間が約5.1m（17尺）、北側の1間は約3.6m（12尺）、梁行が約5.1m（17尺）です。東西廊は南北廊の南から3間目に接続します。基壇の規模は、前述のように、東西廊では東西44.4m（148尺）、南北8.1m（27尺）、南北廊では東西8.1m（27尺）です。南北は南北廊の北端および南端は後世の削平のため明確で

はありませんが、残存部分から推定するとおよそ21m（70尺）です。

B. 東小子房

西端の桁行1間分、梁行2間分を検出しました。ただし、西面中央の柱穴は江戸時代の溝によって破壊されたため、残っていませんでした。柱間寸法は桁行が約3m（10尺）、梁行が約2.1m（7尺、検出したのは2間分で4.2m）であり、西小子房と同一です。西の柱筋は東大房の西側柱列と、北の柱筋は十字廊の東西廊南側柱列と一直線上に位置しています。十字廊と東小子房が統一された設計のもとで築造されたことが分かります。

C. 十字廊と同時期と考えられる周辺の遺構

柱列1 直径1.0～1.3m程度の四つの柱穴が並んでいる遺構です。穴の中には10cm～30cm大の礫や、瓦がつまっていた。東大房および東小子房の西側柱列と同一直線状にならび、かつ南から2番目の柱穴は十字廊の北側柱列の延長上に位置します。東西を隔てる塀と考えられます。

石敷 十字廊の北端から延びる位置で検出しました。南北長さ約6.9m、東西幅約50cmで、西側は近世の溝によって削平されていますが、石があった痕跡がところどころに確認されることから、範囲がさらに西に広がることが分かります。検出範囲が狭く性格は断定できませんが、南北を結ぶ参道の可能性があります。その場合、薬師寺の伽藍中軸線にあるものと考えられ、中軸線で折り返すと東西幅約4.2m（14尺）となります。なお、講堂と食堂の間でも、類似の遺構が確認されています。

建物1 礎石建物で、調査区北端で南北1間分を検出しました。柱間寸法は約3.6m（12尺）です。石敷きの東端とほぼ並んでおり、さらに北方に続く可能性があります。伽藍中軸線で折り返すと東西3.6～3.9m（12～13尺）となり、十字廊と石敷でつながれたなんらかの施設と考えられます。

建物2・3 掘立柱建物で、1975年に今回の東方でおこなった発掘調査で検出された2棟の奈良時代の建物の柱列とそれぞれ一直線上に並ぶことから、これらと同一の建物の柱穴と考えられます。

D. 十字廊建立以後の遺構

瓦廃棄土坑1 十字廊の東北入隅部よりも外側で検出されました。東西5.3m、南北3.9m以上の隅丸方形の遺構です。鬼瓦・軒平瓦・軒丸瓦など薬師寺創建瓦を含む多量の瓦が廃棄されていました。

瓦廃棄土坑2 北側の拡張区で検出された南北3.8m、東西0.7m以上の遺構です。軒平瓦・軒丸瓦など創建瓦を含む多量の瓦が廃棄されていました。

土器廃棄土坑1 十字廊の東北側、東小子房の北側に位置します。東西1.2m、南北0.9mのすり鉢状の土坑で、10世紀末頃の土器が数十枚重ねて捨てられていました。

土器廃棄土坑2 十字廊の東北入隅部付近で検出された、十字廊の基壇を掘り込んでいる遺構です。東西2.3m、南北1.7m以上の楕円形で、土師器碗など11世紀の土器や、多量の炭が出土しました。

土器廃棄土坑3 北側の拡張区で検出しました。東西2.9m以上、南北3.1mで不定形。羽釜などの土器が瓦とともに多量に出土しました。

瓦暗渠あんきょ 中世の瓦を用いた東西暗渠を1条検出しました。この暗渠は、東西廊南面雨落溝の延長上にあり、十字廊の南北廊の基壇を破壊して設置されていました。長さ3.9mが残存していますが、東部はより新しい時期の溝によって破壊されています。

木樋 木の板を組み合わせた近世の水路です。木蓋をかぶせた部分とそうでない部分が見つっています。前者が暗渠、後者が開渠であった可能性が考えられます。

E. 遺物

今回の調査では、膨大な量の瓦や、土器が多数出土しました。瓦は、古代を中心に近代までの軒瓦のほか、鬼瓦、^{せん}磚などがあり、土器には羽釜や土師器の碗・坏、かわらけなどがあります。

5. まとめ

今回の薬師寺十字廊の発掘調査により、以下のような成果が得られました。なお、十字廊の遺構は一時期分しか検出しておらず、これが最初に建立された時のものとみられます。明確な建て替えの痕跡は確認されませんでした。

① 十字廊の建物と基壇の規模

薬師寺十字廊は東西 44.4m（148 尺）、南北約 21m（70 尺）の基壇をもつ礎石建物で、建物の規模は、東西廊が桁行 11 間・梁行 1 間、南北廊が桁行 4 間ないし 5 間・梁行 1 間であることが判明しました。建物規模は東西 141 尺、南北 49 尺以上と推定されます。この数値は、東西廊については『薬師寺縁起』に記された規模に一致します。南北廊については記載通りかは不明ですが、やはり『薬師寺縁起』に記された規模と大差ないものと推定されます。

② 基壇築成の工程

基壇は、地山上や、地山を掘り込んだ面の上に整地を施し、版築などを用いて築成されています。礎石を据え付けるための壺地業は、基壇をある程度積み上げた段階で施工されています。なお、一部では壺地業の上に基壇土を積み上げて礎石を据えていたと想定できる部分も見られます。

③ 十字廊の造営と廃絶の年代

十字廊の造営年代は奈良時代後半頃とされていましたが、今回の調査結果もこれと整合的です。また、基壇を破壊している土坑から 11 世紀の土器が出土していることは、十字廊がこの時期以降に廃絶したことを示しています。

④ 十字廊の周辺の様相

十字廊の北側には参道と推定される石敷と、その北側に位置する礎石建物を検出しました。また、十字廊の東側には、東小子房や南北柱列を確認しました。

以上のように、薬師寺十字廊とその周辺に関する様々な知見を得ることができました。中でも十字廊の建物と基壇の規模がほぼ確定したことは大きな成果です。また、十字廊の周囲の施設、特に十字廊の北側や東側の空間利用についても新たな知見を得ることが出来ました。このように、今回の調査では、薬師寺内部の施設配置という面だけでなく、全国的にもほとんど明らかにされていない古代寺院における食堂の背後の具体的な様相を明らかにしたという面でも、貴重な成果となりました。

問い合わせ先：奈良文化財研究所 都城発掘調査部 遺構研究室長 箱崎和久（0742-30-6836）

建物2

建物1

建物3

石敷

瓦廃棄土坑2

土器廃棄土坑3

木樋

柱列
1

十字廊の基壇の範囲
きだん

瓦廃棄土坑1

土器廃棄土坑1

土器廃棄土坑2

十字廊

東小子房

瓦暗渠

食堂

